

# エックハルト、ラテン語説教における三位一体論

中山善樹

## I 序 論

周知のように、三位一体の教義は、キリスト教の中心的教義の一つであり、簡略に定式化するならば、本質において一なる神は、三つのペルソナ、すなわち父 (pater)、子 (filius)、聖霊 (spiritus) であるというものである (una essentia, tres personae)。この教義は、その外観の簡素さとは裏腹に、その内実は極めて理解するのに困難なものであり、そこから現代に至るまで、キリスト教の奥義 (mysterium) の一つに数えられている。しかしまさに、それゆえに、この教義はアウグスティヌスを初めとして、古来、多くの哲学者、神学者によって知解すべく試みられてきたものであり、そこからまた、数え切れないほど多くの論議を呼び起こしてきたものである。奥義はまさに奥義のゆえに、放置されることはできず、それへの果敢な知解の試みを誘って止まなかったのである。

これは一つには、三位一体の教義は、「神とは何か」というキリスト教にとって最も本質的な問いに対する教会の側からの答えに他ならなかったからである。この根本的な問いをめぐる三位一体論は論議されてきたのであり、そ

の論議を通じて、キリスト教哲学は形成されてきたと言っても過言ではないほどである。

エックハルトもさまざまな著作で三位一体論を論じている。その論議には様々な位相と段階があるが、ここではそのラテン語説教においてエックハルトがどのように三位一体論を展開しているかを素描することにした<sup>(1)</sup>。そのことによってエックハルト思想の最も内奥の形態が何ほどか明らかになるであろう。ここでは、議論の展開上、まず「父なる神」(deus pater)、次いで「子なる神」(deus filius)、最後に「聖霊なる神」(deus spiritus)についてのエックハルトの論を見た後、「一なる神」(deus unus)についてエックハルトがどのように論じているかを一瞥してみたい。

## II 父なる神

それでは、エックハルトは「父なる神」についてどのように把握しているであろうか。エックハルトによれば、父はすべての神性の始原であり<sup>(2)</sup>、父は神的なものにおける第一の位格である。父が父であるのはその父性 (paternitas) によるのであり、父性によって、父は子でもなく聖霊でもなく、父であるのである。父が働くところのすべてを、父は父性によって働くのであり、他のいかなるものによって働くのではない。それでは、父性とは何であろうか。父性とは、エックハルトによれば、第一のもののことであり、万物の始原であり、そこから父はそれ自身に属する下級のものと降下するのであり、すべてのものに豊かに与えるのである<sup>(3)</sup>。そういう意味において父性は、豊穡性の名である。そしてその根源的な父性から、天における、かつ地におけるすべての父性は名付けられているのであ

る (ex quo omnis paternitas in caelis et in terra nominatur) (エフエ、3、15)。

したがって、父は第一の「そこから」であり、本来的な意味における「そこから」である。父の「そこから」子は、子が他のものであることを持つのであり、また「そこから」聖霊が生じるのであり、また「そこから」すべての被造物が生じるのである。子は、父から聖霊がそれであるところのものを持つのであり、聖霊は子を通してであるが、父からその「そこから」を持つのである。子と聖霊が持つすべてのものは父から彼らに來たものである。その全体は父から生じるのであり、それは第一のものとしての「それから」であり、ないしは第一の「それから」である。しかし同時に、父はそのすべての属性を伴って、子のうちへと降下してくるのであり、父と子の間には、いかなる區別もない。エックハルトによれば、それによって父が子を生む能力と、それによって子が父から生まれる能力は、同一のものであり<sup>4)</sup>、父は子がそれであるところのものである。そしてこの子において、父は天と地とを、すなわち世界を創造したのであり、したがって子の出生 (generatio) と同じく、世界創造は第一義的に父に歸せられるものである。

### III 子なる神

次に、エックハルトは子なる神をどのように把握しているであろうか。子なる神も、父と一なる、かつ同一なる始原である。エックハルトによれば、子は父の像 (imago) であり、像は、それがその像であるところのものと数において異なるのではなく、二つの実体でもなく、一つのものである<sup>5)</sup>、別のもののうちにあるのであり<sup>6)</sup>、「私は父のうちに

あり、父は私のうちにあるのである」(*ego in Patre et Pater in me est*) (ヨハ、14、10・11)。像は、子の本質を持つのであるが、それは、像が、同じ本性のうちに発出してくるものであり、すべてにおいて生み出すものと同等であり、似ているからである。像ないし子は、父のうちにあり、父は子のうちにあり、子は父のうちにあって父と一なるものである (*ego et Pater unum est*) (ヨハ、10・30・38)。子は完全な似像 (*similitudo*) として、愛すなわち聖霊を息しているのであり、聖霊も子と同様に、非被造的なものとして、像である子のうちに留まっており、子は聖霊のうちに留まっているのである。子には、そのペルソナの属性に基づいて、「うちにある」ことは決して帰属することではなく、ただ「よってある」ことが帰属するのである。「彼によってすべてのものは造られた」(*omnia per ipsum facta sunt*) (ヨハ、1、3) における「彼によって」とは、すなわち子によって、ということであり、すべてのものは子によって造られたのである。子は、父と聖霊とともに、すべての被造物の一なる始原である。

エックハルトによれば、神が認識されるころでは、神は子としてあるのであり、父は子のうちにあるのである<sup>⑥</sup>。われわれは父なる神を直接認識することはできない。われわれは子によって父を認識するのである。それはちょうど色そのものは、目のうちにおいては、確かに同じ存在の下にあるが、別の状態においてあるのと同様であり、そこでは、生む父と生まれた子は、一つの本性のうちにあり、一つの存在を持っているのである。その一つの存在から、生むものもあるのであり、生まれるものもあるのである。この根本事態は、聖句において次のように表現されている。「父の懷にいる独り子が告げるのである」(*unigenitus Filius qui est in sinu Patris ipse enarrauit*) (ヨハ、1、18)、さらに「子以外の誰も父を知らない」(*neque Patrem quis novit nisi Filius*) (マタ、11、27)。

#### IV 聖靈なる神

それでは、エックハルトは聖靈なる神をどのように把握しているのでしょうか。エックハルトによれば、神はまさに聖靈のうちで、われわれのうちにあり、われわれはまさに聖靈のうちで神のうちにいるのである<sup>(7)</sup>。「彼においてすべてのものはある」(*in ipso omnia*) (ロマ、11、36)と言われる際の「彼において」とは、聖靈において、ということであり、聖靈の属性は、すべてのものがそのうちにあるということである。聖靈のうちにないものは、必然的に無であり、聖句にも次のように言われている。「彼なくして生じたものは無である」(*sine ipso factum est nihil*) (ヨハ、1、3)。さらに「彼のうちでわれわれは生きており、動いており、存在している」(*in ipso enim vivimus et movemur et sumus*) (使、17、28)。

このようにエックハルトによれば、聖靈はそのうちで万物が存在しているところのものであるが<sup>(8)</sup>、とりわけ真なるものがそのうちで存在しているところのものであり、この意味で、聖靈は真理の霊である。真なるものは、誰によつてそれが語られようとも、聖靈によつているのであり、聖靈においてでなければ、誰も何らかの真なるものを語ることはできない。エックハルトによれば、聖靈とは、この意味で真理そのものであり、すべての真なるものは、いかなる媒介もなく、ただ聖靈においてのみ真である<sup>(9)</sup>。この意味で、聖靈は人に真理を教えるところのものである。真理は、したがって知恵は聖靈の賜物のなかで第一のものである。

さらに、父と子とは、われわれを聖靈によつて愛し、われわれもまた、神を聖靈のうちで愛するのである。父と子

とが互いに愛し合っているところの愛は聖霊そのものであり、われわれが神を愛する愛、すなわち神愛も聖霊そのものである。この意味において、聖霊は靈魂をして世の上へと持ち上げるものであり、エックハルトによれば、聖霊によつて教化されたいと願う人は、自分自身の靈において貧しくあらねばならないのであり<sup>40</sup>、すべての被造物から離脱しなくてはならないのである。

## V 一なる神

最後に、エックハルトは一なる神をどのように把握しているであろうか。エックハルトによれば、父と子と聖霊は、存在 (*esse*) において一なるものであり、存在に関わる本質 (*essentia*) において一なるものである<sup>41</sup>。しかしこの「一なるもの」であると言われるときに、この「一なるもの」という語は、数の類に関係するのではなく、神のうちに何かを措定するのでもない。むしろ神はその存在そのものであり、その存在そのものからすべてのものはあり、存在によつてすべてのものはあり、存在のうちにすべてのものはあるのである。

この関係をさらに詳しく述べると、エックハルトによれば、父とは、そこからすべてのものが作用的にあるところのものであり、子とは、それによつてすべてのものが形相的にあるものであり、聖霊とは、そのうちにすべてのものがあたかも目的のうちにいるようにあるところのものである<sup>42</sup>。聖句に「彼から、彼によつて、彼のうちにすべてのものはある」(*ex ipso et per ipsum et in ipso omnia*) (ローマ、11、36) と言われている際の、「彼から」とは、作用因の理念を表しているのであり、「彼によつて」とは、形相因の理念を表しているのであり、「彼において」とは、目

的因の理念を表しているのである。そしてこれらの作用するもの、形相、目的は、神のうちにおいては存在であり、作用するものはその存在から作用するのであり、形相はその存在によって形成するのであり、すべての目的はその存在において動かすのである。このように、エックハルトによれば、神と被造物とは、二つの作用するもの、二つの形相、二つの目的ではなく<sup>⑧</sup>、根源的には、神のみが真の意味において作用するものであり、形相であり、目的なのである。

以上のすべての意味において、エックハルトによれば、存在するものは、父のゆえに、神からあり、子のゆえに、神によってあり、聖霊のゆえに、神のうちにあるのであり<sup>⑨</sup>。「これらの二つのものは一なるものである」(*tres unum sunt*) (130ハ、5<sup>r</sup>、7<sup>r</sup>)。

#### 注

- (1) 使用テキストは次のとおりである。Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, herausgegeben im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Die lateinischen Werke, Bd. IV, Magistri Eckhardi Sermones, herausgegeben und übersetzt von E. Benz, B. Decker und J. Koch, Stuttgart 1956 (略号、Ser.)。
- (2) Ser. n. 4 : *pater principium est totius creaturis*. これはアウグスティヌス『三位一体論』第4巻第20章に由来する。
- (3) Ser. n. 362 : *paternitas descendit se toto in suum inferius, et iterum dat omnibus affluenter*.
- (4) Ser. n. 6 : *Id ipsum est potentia, qua pater generat et filius generatur*.
- (5) Ser. n. 510 : *imago cum illo cuius est non ponit in numerum nec sunt duae substantiae, sed unum in alero*.
- (6) Ser. n. 515 : *Ibi (deus invenitur et nusquam alibi) est deus proles, deus in prole, pater in filio*.
- (7) Ser. n. 25 : *deus non sit in nobis nec nos simus in deo nisi in spiritu sancto*.
- (8) Ser. n. 26 : *in ipso sunt omnia*.

- (9) Ser. n. 219 : (spiritus sanctus) qui est veritas, et ipso sine medio quolibet est verum.
- (10) Ser. n. 2 : qui vult aedificari spiritum sancto, debet esse pauper spiritu proprio.
- (11) Ser. n. 8 : in esse sunt unum, in essentia, quae respicit esse.
- (12) Ser. n. 12 : pater ex quo omnia effective, filius per quem omnia formaliter, spiritus sanctus in omnia ut in fine.
- (13) Ser. n. 29 : non sint ergo duo efficientia, duae formae, duo fines.
- (14) Ser. n. 220 : omne quod est, a deo est propter patrem, per deum est propter filium, in deo est propter spiritum sanctum.